



ファイ、フツとぞ

『平家物語』の「那須与一」の表現は印象的だ。「(扇は)しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬしづみぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり」——リズム感のある言葉にスローモーションのような映像。日を描いた真っ赤な扇は夕暮の空の色を背景にひらひらと春風にもまれて落ち、白波に漂う。舟へは八〇メートル近い(七段ばかりはあるらむ)。目標は波で動く。与一も元々自信があつたわけではない。みんなの前でプレッシャーに負けず、その扇の真ん中を見事に射ぬいた。その後、感に堪えず舞を舞う武者の首まで射る。鎧でも首は急所。強い殺意だ。実は、この前に美人の乗った舟が出てきたところで、「あれはいかに」といぶかしがる義経に「大將軍、矢おもてにすすんで傾城を御覽せば、手たれ

にねらうて射おとせとののはかり事とおぼえ候(大將軍が前に出て美人を御覧になつたら、上手に狙つて射落とせという作戦と思います)」と部下が忠告する場面がある。そこから考えれば名手なら一応射程内だったとも言える。

その点壇ノ浦の合戦での「阿佐里与一」という別の与一さんはもつとすごい。四五〇メートルくらい先まで射て(四町余をつつと射わたして)、「大舟の舳にたつたる」武將を射倒す話がある(「遠矢」)。ちなみに現在の弓道では近的場が二八メートル、遠的場が六〇メートルだ。もつとも、扇が四五〇メートル先ならもう描写などできなない。

さて、映像だけでなく音にも注意したい。弓矢で定型的に使われる表現の「よつびいてひやうど放つ」(「と」が前の音の影響で濁音になっている)の「ひやう」。擬音語的だ。この時代の「ひ」は今とは違い「フィ」のような音とされている。「ひやう」は「フ

イアウ」という感じが近いだろうか。

いかにも矢が飛んでいく感じた。扇に当たるところは「ひいふつとぞ射切つたる」。「ファイ、フツ」という感じだ。なお、後にポルトガル人宣教師がローマ字で記した天草版の平家物語の該当部分では「フィップツ」となっている。続いて、武者を射る描写には「ひやうふつと射る」とある。「フィアウ、フツ」という感じだろうか。動詞も含めて微妙な違いがおもしろい。なお、天草版ではここは「フィアウツツと」だ。

放つ瞬間の風を切る音、かぶら矢の大きな音、命中音、どよめき……。音の世界も実に豊かだ。盛者必衰の主題やキャラクターの描き方なども読ませるが、平家物語の臨場感あふれる表現の世界も楽しく味わいたい。

『平家物語』の原文は『国語2』(光村図書)と『新編 日本古典文学全集』(小学館)による。『天草版平家物語』は『天草版平家物語対照本文及び総索引』(江口正弘 明治書院)による。

早稲田大学教授

森山卓郎